

「ハイデルベルク・ストラスブル派遣 参加報告書」

京都大学文学部2年 清水来奈

ハイデルベルクの学生とのワークショップに重点を置いて報告する。

約12時間のフライト、乗継のため全速力で駆け抜けたアムステルダム空港、故障によりシャワーの出ない浴室…。しかし、翌日の朝、そんな数々の困難も一瞬で消え去ってしまうような美しいハイデルベルクの街並みが私たちを迎えてくれた。前日からの疲れなど忘れ、数時間後のワークショップのことは一旦頭の隅に追いやり、朝食の後散歩に出かけた。色鮮やかな建物の並ぶ石畳みの道、日本とは全く異なる景色を歩くと、自分がまるで映画の中のワンシーンにいるかのような気分になり、このような街並みを歩いて登校できるハイデルベルクの学生をうらやましく思った。しかしそんな幸せな気分に入りヨーロッパの空気を生身で感じつつも、ふとした瞬間に欧州の抱える移民問題を匂わせるような要素を街のところどころで感じ、その日行うプレゼンテーションのテーマの一部である移民・難民問題について早速考えることとなった。

ハイデルベルク大学に一步足を踏み入れると、すれ違う人々を見渡すだけでも様々な異なるルーツを持った人々がいることを感じ、これから取り上げる問題について意識させられた。私のグループは日本で行われるヘイトスピーチとヨーロッパでの大規模デモを取り上げ、その後のディスカッションでは在日や移民に対する人々の意識の違い、政府の対応の差などが話し合われた。次のグループでは在日と在日に対する日本人の意識に焦点を当て、それから食を通して見えるナショナリズムについて発表が行われた。ハイデルベルクの学生による発表テーマには移民のルーツを探るものから、アイヌ民族、広島・長崎の原爆投下にまつわるものがあり、その内容も高度なものであった。

これら数々の発表と、ハイデルベルク大学生とのディスカッションを通し、外国人に対する日本人とヨーロッパ人々の考え方の違いを大きく感じた。ハイデルベルク大学の生徒は、自分のルーツ、自分が一国の国民であることを強く意識しているように感じた。確かに、19世紀まで鎖国によって外との交流をほとんど閉ざしてきた日本と、移民と切っても切り離せないヨーロッパでは、「内と外」についての考えが根本から違ってくるのは当然であるが、こんなにも意識が異なるものかと非常に驚いた。

また、ハイデルベルクの学生は様々な問題を自身の置かれた環境や自分の研究分野の話に置き換え、オリジナルな意見を発信・交換する能力が高く、皆が活発に手を挙げ発言していた。ディスカッション形式の授業にほとんど参加したことがなく、常に受け身の姿勢で授業を受けてきた自分とのレベルの違いを痛感させられた。確かに、年齢の差による知識・経験・能力の差、国民性の違いからくる積極性の違いはあるといえど、これまでの自分の学びの場における態度を見直す良い機会となった。今、帰国して約二週間が経つが、この意気込みを忘れずにこれから勉学に励んでいく所存である。

他にも強く印象に残ったのは多々あるが、その一つがハイ大生の語学能力の高さである。中には五、六ヶ国語を易々と操り、Language master と称される学生もいた。英語とは6年間、フランス語とは2年間寄り添ってきたにもかかわらずほとんど身になっていない自分とは、言語に対する取り組みの姿勢が全く違っているのであろうと、またしても自分の学びに対する姿勢を見直す機会を得た。

この研修での約一週間、ヨーロッパの人々の国民としての意識や移民・難民に対する考え方を常に生で感じることができたが、一方で自分自身の日本に対する考え方、日本国民としての意識は曖昧なままであった。彼らの姿勢を目の当たりにした後で、自分には日本人としての意識、国を愛する気持ちが不足しているのではないかと不安になった程である。しかし、帰国後すぐに京都の地を歩き、ヨーロッパとは全く異なる日本の文化に触れたことで、自分の日本人としての意識を以前よりも強く感じる事ができた。ハイデルベルク・ストラスブルで触れた様々な意見や得た知識をそこで終わらせるのではなく、今度は日本という地で改めて考え直していくことが重要である。

自分にとってヨーロッパを訪れるのは今回が初めてであり新しい体験をすることができたが、明確な研究テーマを持ち現地の学生との交流を目的としたこの研修は、多くの大切なことを学び、得ることのできた非常に貴重な体験となった。